

最近のトピックス

(1) 中国南方の雪害による緊急援助のモニタリングを実施



霍山県衡山鎮迎駕厂村 同行した民政部担当官たち

2008年年初、中国の南部は50年以來の大雪、低温天氣に遭い、住民生活、交通及び電力供給に大きな被害が出ました。2月5日の旧曆正月直前に日本政府からの緊急援助が行われることが決まり、7日にシンガポールにある備蓄基地より、緊急救援物資が上海空港に送られました。援助する物資は毛布3,000枚、スリーピングマット2,100枚、発電機300台等です。中国政府はこれらの救援物資を安徽省に配布することを決定し、春節期間中、迅速に安徽省への輸送や救援物資の配布が行われました。それを踏まえ、今回安徽省民政庁が担当した緊急救援物資の配布状況をモニタリングしました。

日本政府から提供された救援物資は六安市の霍山県、安慶市の太湖県に半分ずつ配布されました。今回、六安市の霍山県の一部をモニタリングしました。霍山県は合肥市より西150キロの町です。50年以來の大雪に遭った霍山県は山地が多く、40cmほどの雪が積もり、一部は70cmの雪も積もっていました。一部住民の家屋は壊れ、農産物の被害も発生していました。

視察前の協議の席上、霍山県委員会李書記及び闕(カン)副県長は以下のように述べました。

「日本政府より頂いた緊急救援物資を含む寄付物資は、厳しい交通状況のもとで、政府・民政担当者がいち早く被災者に配布しました。

今回の日本政府による援助に感謝します。直接受益者は約4000名ほどです。発電機は小学校、衛生院(郷・鎮レベルの医療施設)、老人ホームを対象として配布しました。霍山県においては貧困家庭がとて多いため、毛布とスリーピングマットは、5保戸(食、着る、医療、住む、葬式にかかる経費について政府が保証する。いわゆる極貧対象者のこと。)に絞って配布対象としました。配布時に日本政府による支援であることを説明し、引渡し式を行いました。」

今回、訪問した霍山県衡山鎮老人ホームは敷地が広く、院長、会計、コック、医者、保育員の5名の従業員が、35名の入居者を世話しています。入居の資格は70歳以上であること、世話する家族がいないこと、固定収入がないことであり、敷地内に野菜を栽培し、自給しています。今回の緊急援助物資に関し、毛布35枚、発電機1台が配布されていました。

受益者の1人である楊さんは霍山県衡山鎮迎駕厂村の村民です。40代で、5保戸対象者です。今回の雪害で家屋が1月20日に倒れてしまいましたが、幸い人身被害はありませんでした。現在、病気のある夫と昼はテント暮らし、夜は隣人の一室を借りています。今家屋の再建をしています。家屋の再建のために政府は一部屋につき6000元の補助金を出すこととなっています。楊さんの場合、

2 部屋を建てているため、12000 元を補助されるとのことです。当たり前ですが、地方においても 12000 元で家を建てることはできません。それ以外の資金や資材は親戚や村人から出し合ってもらうものとしています。楊さんの家族には毛布とスリーピングマット 1 枚ずつ配布されました。

全体の配布状況については、政府の主管部門である中国民政部以下、省・市の民政庁、県の民政局、郷・鎮の責任者、村の担当者まで、一貫して管理体制がきちんと整えられており、各レベルで文書や指示が迅速に伝達されている印象を受けました。地方の民政担当官は割合若く、責任感も大変強く感じられました。

中国農村部においては、また貧困人口がとても多いです。貧困対策や災害対策に中国政府は積極的に取り組んでいます。今回の被災地域において農村貧困人口の絶対数が多く、政府予算だけで対応しきれない部分もあります(霍山県昨年の収入は 5.1 億元であることに、支出は 7 億元あまりです)。今回の援助では、一部の被災者を救済することができました。しかし一人ひとりの被災者に直接届くように、中国政府を始め、その他の援助ドナーも救済支援を拡大する余地はまだあると感じました。

貧困対策は時間がかかり、すぐに改善されることは難しいと思います。但し人間の安全保障の観点から、日本の経験を生かして農村医療保険や農村養老保険等について支援可能な分野は多いと思います。今回の支援が今後これらの分野のプロジェクトにつながっていくことが期待されます。

(業務班 邢軍)

(2) 「農村女性による住民参加型健康推進プロジェクト」の専門家現地活動について(草の根技術協力事業)

2 月中旬から 3 月初めにかけて、草の根技術協力事業「農村女性による住民参加型健康推進プロジェクト(地域提案型)」実施機関である帯広市の専門家(健康保健と栄養分野)が中国に来られ、協力サイトの遼寧省朝

陽市で現地活動が行われました。

帯広市と朝陽市の友好都市関係に基づき、2006 年から開始された本案件は、貧困農村のニーズを踏まえ、対象地域(喀左県十二徳堡郷太溝村)の農村女性を中心に住民参加型の健康推進活動を行い、政府の支援がまだ行き届かない村の農民が自ら地域の問題へ取り組み、生活の質の向上を図る健康活動を支援するものです。3 年間の協力期間で、現在第 2 年目に入りました。

今回の専門家の活動では昨年度の実績を踏まえ、引き続き村民の健康保健・栄養に関する調査を実施し、村民の食生活・健康衛生に関する助言を行い、また専門家による村民向けの健康栄養講座が数回にわたって開かれました。これらの活動を通じて、食生活、衛生管理など、村民間の健康意識が従来以上に向上され、病気に抵抗力のある身体がつけられるよう真剣に取り組んでいる状況が見られました。



健康栄養講座に参加した農村女性

専門家の現地活動とともに、人材育成・継続的な発展といった視点から、対象地域の郷・村の婦人リーダーを研修員として日本へ招き、帯広市で住民活動、特に女性グループによる食生活改善及び普及など活動の実施・運営方法に関する研修も実施されてきました。本邦研修を通じて農村の女性リーダーは地域住民が抱える健康衛生の問題について一層認識を深め、また問題解決のための健康推進活動に積極的に取り組む能力を養ってきています。活動の現場において、オーナーシップを発揮して積極的に活動されている帰国研修員の姿がとても印象的でした。

当該案件は人間の安全保障、ジェンダー

主流化推進という視点を重視した協力の好事例であり、草の根技術協力事業の性格に非常に相応しいプロジェクトと言えます。3月4日、専門家の今回活動報告を聴取した科学技術部中日技術合作事務中心の李勇生主任は以下のように当該プロジェクトの実施を高く評価しました。

「帯広市の専門家たちが朝陽市の農村住民にいろいろな予防、保健などに関する知識を伝えていただいていることに感謝します。現代医学の角度から見れば、予防は治療よりも重要だと思います。しかも、予防のほうはもっと経済的です。特に中国のような大きな発展途上国において、また医療衛生の発展がまだまだ遅れている中国農村にとっては、このようなプロジェクトが非常にふさわしいと思います。このプロジェクトは農民の負担を軽減することができると共に、社会弱者の生命、健康を守るのに実施した良いプロジェクトです。太溝村で得た経験をもっと広い範囲まで広げ、より多くの民衆が受益できるように、より広範なる地域の健康保健水準を向上するようお願いします。」

今後第3年次(2008年度)の活動計画において、日中関係者が更に十分な意思疎通・意見交換を行った上で、引き続き専門家の現地活動や研修員の受入れを実施していく予定です。

(相互理解班 周妍)

(3) 日中環境教育基地ワークショップ

近年、中国においては、環境教育を通じた市民の環境保全意識の向上や問題解決能力の育成が重要視されるようになっており、第11次5カ年計画期間中においては、環境教育を実施する拠点の整備が重要施策とされています。このため、日中友好環境保全センターは、JICAに対し、平成20年度要請として「循環経済推進プロジェクト」を提出し、そのサブプロジェクト「国民の環境意識向上」の一つとして、環境教育施設の整備に関する協力を要請しました。この新規プロジェクト開始にあたり、中国における当該分野の現状と課題を把握し、今後の効果的な技術協力の

実施に活用することを目的として、2008年3月10日から11日の2日間、北京で「日中環境教育基地ワークショップ」が開催されました。

ワークショップには、各地方の参加者の交通費は自己負担であるにも拘らず、定員を上回る申込みがあり、約10つの省および自治区から環境教育担当行政官、環境教育施設の職員、環境NGO、他ドナー、大学関係者、教育部門関係者など、あわせて60名が参加しました。日本からは、2名の講師が、それぞれ日本の自然学校とエコスクールの経験について、スウェーデンから持続可能なスウェーデン協会の理事がエコ自治体運動について発表しました。また中国側からも各地域の特性を活かした個性的な環境教育事業の事例紹介があり、参加者が現場で環境教育事業を推進する上で役に立ちそうなアイデアやヒントを共有しあうことが出来ました。



ワークショップの様子

また参加者からは、JICAの新しいプロジェクト「国民の環境意識向上」に対する強い関心が示され、中国側の積極的に海外の先進的取組みを学びたいというニーズの高さが伺えました。今回のワークショップを通じて感じたことは、環境教育というテーマは、特に異なる組織間の協力があまり活発でない中国において、NGO、大学、行政、ドナーなど各主体が共通目標達成のために連携しやすい分野であり、またそうすることでより大きく、加速度的な効果が得られ、かつ様々な環境課題の解決にもつながっていくテーマだということです。

広大な国土と人口を抱え、今後ますます

環境問題が深刻化する中国において、国民の環境意識向上を目指して協力を進めることは、非常に意義があるものです。今後は、本ワークショップで構築した各主体間のネットワークを活用して、日中友好環境保全センターの新規プロジェクトの効果的かつ迅速な実施が促されることを期待します。

(業務班 長安美恵)

ニュース

■ 「草原における環境保全型節水灌漑モデル事業」の運営指導調査団の来訪

2月25日～3月4日の間、「草原における環境保全型節水灌漑モデル事業」の運営指導調査団が中国に来訪しました。

このプロジェクトは効率の良い灌漑方式を導入し、飼料を効率的に生産して羊をできるだけ放牧させないで、自然の草地を保護し、環境悪化を防ごうというものです。北京での協議の他、実証サイトの一つである内モンゴルへの調査に同行し、真っ青な空の下、緑の草原がどこまでも続く。。。とはいきませんでした(冬なので)、中国の広大な大地を見ることができました。

牧民の家を訪れると数十頭の山羊(羊ではなくほとんど山羊だった)が飼料を食べていましたが、北京赴任前に近所のジャスコで買ったカシミアのコート(made in China)はこいつの毛かもしれない、と思うと妙に親しみを覚えました。また、内モンゴル滞在の最終日の夜は風が強く大荒れで、部屋の中まで砂の臭いが充満する始末。その2日後には日本各地で「黄砂発生」のニュースが大々的に流れました。この大草原が経済でも自然でももう世界と切れない関係にあることを実感した次第です。

プロジェクトは今年から灌漑施設の本格的な実証試験に入り、その結果は、このプロジェクトの成果として今後作成される灌漑施設の計画策定マニュアル(水利部より出版される予定)に活かされることとなります。

まだまだ始まったばかりのプロジェクトですが、日中双方のプロジェクト関係者と協力して、ぜひ実りある成果を出したいと思えます。

(業務次長 松本高次郎)

■ 四川省涼山州金沙江流域生態退化地区における総合貧困対策モデルプロジェクト予備調査が実施される！

3月6日から11日までの間2007年度に採択された「涼山州金沙江流域生態退化地区における総合貧困対策モデルプロジェクト」について本格的な実施に向け調査が行われました。

本プロジェクトは四川省涼山州金沙江流域の協力対象地区において自然環境と調和した営農支援・住民支援体制の確立を目標とした総合農村貧困対策にかかる技術協力プロジェクト(小規模農業インフラ整備、栽培技術の移転、収入向上策の検討、地域保健や基礎教育の強化、研修による地域の人材育成、技術普及体制の強化)を実施することを目的としています。

本調査では今後実施されるプロジェクトに関する基本計画策定のための事前評価調査団の派遣を実施するに当たり、必要な情報収集及び州政府との事前の打合せを行ったものです。

今回の調査は要請書の5つのモデル村のうち会東県の半山村と寧南県の拉堡村で行われました。半山村は5つのモデル地区のう

ち唯一の漢族の村であるが、耕地の多くは段段畑となっているため、水土流失防止事業が行われており、換金作物として桑の木を植え、さらに養蚕事業も展開されていました。桑の木を植えることにより、土壌流失もある程度防止するようになっていたため、これをモデル事業として普及することが現実的であると思われました。



調査団の現地調査の様子

それに比べ拉堡村はイ族の村であり、全村 1280 人のうち小学校先生3人以外は全部イ族です。村は海拔 2000m くらいのところに位置しており、半山村のような換金作物栽培

が難しく、斜面に畑を作り、耕作を行っていました。村民の生活も厳しく、耕作地までのアクセスも大変で、自分の耕作地を 100% 耕作できない農家が多くありました。土壌流失対策も充分に行われでらず、流失が多いようでした。

現地調査後、西昌における州政府との打合せにおいて、モデル村の絞込みや、今後の活動内容及び日中両方の負担事項等についてお互いに意見交換を行い、今後のプロジェクトの実施方針を基本的に固めました。最後に今後のスケジュール等についてお互いに確認を行いました。

本プロジェクトは「普及モデル」の良し悪しが成否を分けるものと思われまます。「成果」の内容は当然として、関連機関の施設連携、農民自身による活動や行政との連携など「総合的な施設連携モデル」としての視点も重要です。今後本プロジェクトを通じたこれらの目標の達成が期待されます。

(業務班 林哲浩)

人の動き・主要行事

(1) 主な調査団(派遣中・派遣予定)(3月)

「金沙江貧困対策」事前調査団(3/5-12)

北陸支部草の根モニタリング調査団

(3/13-20)

「中国首都周辺風砂被害地域植生回復モデル計画」調査団(2/17-3/14)

循環型経済推進プロジェクト第1次事前調査団(3/23-29)

持続的農業技術プロジェクト事前評価調査(3/16-29)

(2) 3月の主要行事

なし

～東京の空～



2007年度中国青年指導幹部訪日視察団 青鋒
(金閣寺にて)

3時間あまりのフライトの末、私達を乗せたCA925便は日本上空に差しかった。眼下には青い海がどこまでも広がっており、日本列島は数珠をつなぎ合せた様に太平洋の海原に静かに横たわっている。白く輝く雲が空と海の境界線を成し、飛行機の窓を通して新鮮な空気が運ばれて来る気さえする。果てしなく続く青い海、澄んだ空、そこにはただ地平線があるのみ、人が作り出した線や境は全てこの青色に溶け込んでいる。

空港を離れ、私達は真っ先に日本衆議院議長河野洋平氏のもとを訪れた。ごく普通の大通りに面した所に、これまた目立たない議長官邸があった。河野議長はさほど広くない応接間で熱弁を振るわれ、東京の空について熱く語られた。議長のお話は「今日は快晴で、東京は青空が広がっています。東京の空は北京へと続いており、その間には何も隔てるものはありません。私達は一つ空の下に暮らしているのです。しかし、東京の空もかつては灰色で、空気も悪く息苦しさを感じる時もありました。その後、環境整備に力を入れ新たな技術を導入した結果、今日の澄んだ空気と青い空を取り戻すことが出来たのです。私達は互いの経験に学ばなくてはなりません。美しい空が戻り、皆が健康で長生きできるよう、日本の環境技術がお役に立てればと思います。」というものであった。

日本人が東京の青空について話す時、そこには自信と誇りそして反省が滲み出ている。

1960～1970年代、日本の工業は急成長を遂げたが、その一方で環境問題を引き起こし、東京の汚染も大変深刻であったと私も記憶している。通訳の安さんによると、当時、汚染により多くの方が病気になった。空は灰色で水質汚染も進んでおり、今日まで尾を引いている問題もあるそうだ。日本は環境問題の解決に大きな代償を支払った。しかし長年の環境整備のお陰で現在の環境は大変素晴らしい。

汚染を放置し環境整備を後回しにした。これが日本の歩んできた道である。また多くの工業先進国も同じ道を辿っている。これはどうしようもない避けられなく定めなのか？私は以前、アメリカの環境学者にこの疑問をぶつけてみた事がある。すると経済発展と環境汚染の関係は関数図形——逆U字曲線であるとの答が返って来た。私の問いに正面からは答えなかったものの、しかしこれは汚染が先で整備が後回しになるのは、一般に避けられない事を間接的に示唆していた。また、私達の目の前の現実がそれを物語っている。だが筆者はこの問題についていまいち腑に落ちず釈然としない。

私達は汚染が人体に有害であると知りながら、それでもなぜその道を歩み続けるのか？それは我々が目先の事ばかりに囚われているせいなのか。利益ばかりを追求しているせいなのか。一部の者が環境を汚染し、被害者は別であるからなのか。市場がバランスを失っているせいなのか。政府の力不足又は十分機能が働いていないせいなのか。はたまたこれぐらいなら大丈夫だろうと感覚が麻痺してしまったからなのか。これらの環境に与える影響を無視した行動が私達から青空を奪っている等等、様々な考えが頭の中を駆け巡る。

環境整備により日本人は緑の山、澄んだ水、白い雲を取り戻した。東京の空の話になると自信に満ち溢れ嬉しそうなのも頷ける。

良い事は皆で分かち合いたい。人は分かち合うことに喜びを感じるものである。

中には日本は海に浮かぶ島国なので、汚れた空気も海風によって吹き飛ばされ汚染が改善されたのではないかと考える人がいるかもしれない。しかし、これは客観的要因に過ぎない。1960年～1970年代、日本列島はやはり太平洋上にあり、今も変わらずそこにある。当時の風はなぜ汚染を吹き飛ばしてはくれなかったのか？どうやら青い空の秘密は人にあるようだ。東京の空は、日本人の頭上にある空だ。彼らの思想、理念、行動がその色を決めているのだ。



東京の空

我々の思想、理念、行動もまた我々の頭上にある空の色を決めているのだ。

礼儀、効率、組織とその他

大変礼儀正しく、お互い何をするにも頷き、ぺこりとお辞儀をし、口をついて出るのは「はい！」というのが私達が日本人に抱いた第一印象である。一日中、人に会うたびに頭を下げるのは大変だと思うが、腹筋も鍛えられるのであろう、道を行く人の中にも大きなお腹をしている人を見かけない。我が同胞も日本に着いて程なく日本人に習い、広い会場の中でも、まるで頭上に梁でも横たわっているかのように腰を屈めては頭を下げお辞儀ばかりしていた。

日本人の作業効率は高い、いや「非常に」という形容詞をつけても過言ではない。一人一人の効率の高さが一国の高度成長を支

え、また日本という国をこのように美しく、精巧に作り上げたのであろう。

では、一体日本人の礼儀正しさと効率の高さはどこから来ているのか？

日本政策研究大学院大学の飯尾潤教授は「日本社会の特徴は、集団で力を発揮するが、一人では無能である。」と仰っておられた。即ち日本社会は大変優れた組織、厳密な組織からなる社会であり、その組織が社会、国全体に強大な力を与えているのである。実際、礼儀、効率も組織から来ており、組織がその源なのである。

厳密な組織は厳格な上下関係を意味している。人が組織の中に組み込まれると自然に上下関係が生まれる。組織が厳密であればある程、上下関係も厳しく、はっきりしたものとなる。そして、目上と目下の違いが生まれてくる。目下の者が目上の者に会えば、しきりにお辞儀をし「はい」を繰り返す。当然、目上の者もそれに応じる。外国人から見ると日本人は互いにひたすら頭を下げ合っているように見える。同輩の間でもそれが習慣となり当たり前になっている。このように礼儀の背景には目上、目下があり、目上、目下の背景には上下関係があるのだ。上下関係の形成は厳密な社会組織の産物である。(当然、これは社会学の角度から考察した結果に過ぎない。)

厳密な組織とはっきりとした上下関係は、人それぞれの役割と自分自身の正しい位置付けを意味している。これまでの社会の実例からも明らかなように、人々の自らの位置付けが間違っていれば、役割分担も上手く行かず秩序は乱れ、組織は崩壊し、社会は安定を失う。全ての人々が自らの役割に満足せず、社会の上層部に上り詰めようとするれば、この社会がどうなってしまうかは想像に難くない。(当然、社会には一人一人が自分の能力を十分発揮できる自由競争の機会が無くてはならない。競争を通して自らの位置付けがはっきりしてこそ目の前の仕事にも打ち込めるのだ。)したがって、厳密な組織では社会構成メンバーそれぞれが、ある程度正確に自らの位置付けが出来ており、またその位置付

けに納得しているのだ。(全ての人が一國を治める政治家に成れる訳が無いのだ)。同時にそこには強い規律も存在する。正確な位置付けとそれを受け入れる姿勢そして規律、これらが生み出す物は責任感である。日本人は責任感が非常に強く、物事を真剣にやらなければ気が済まない。また、そうしないのは恥ずべき事であると感じている。責任感とは人の惰性、心の緩みを戒め律してくれる。これこそが内因が決定要素である事を如実に物語っている。それゆえ、厳密な組織は礼儀だけでなく効率をも生み出すのである。効率は個人の正確な社会的位置付け、社会分業、責任感及び秩序ある組織の上に成り立っている。

如何に効率的に社会を組織するか、これは我々が行政管理体制改革を行う上で避けては通れない問題である。日本社会は我々にそのヒントを与えてくれているのかもしれない。

(2007 年度中国青年指導幹部訪日視察団
青鋒)

～私の中国剣道交流～



第8回アジア剣道選手権大会の様子(筆者右)

去る2月24日に香港で開催された「第8回アジア剣道選手権大会」に、筆者(大久保)は参加してきました。「剣道」とは、日本の武道のひとつで、竹で作った模擬刀(竹刀)を用い、防具をつけた競技者二人が互いに頭部、手、胴体等を打ち合い、勝敗を競うものです。私は、子供の頃に剣道を始め、大学時代まで練習していましたが、社会人になってからは縁が遠くなっていました。

しかし2年前、北京に赴任した際、日本人

会に剣道同好会があることを知り、15年ぶりに練習を再開することにしました。

読者の中には剣道を暴力的、あるいは危険と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし剣道の真の目的は、礼儀作法、規律正しさ、競技相手への尊敬の念、自分の技術を向上させることへの努力の価値という徳目を学ぶことです。また剣道は防具があるため、老若男女誰でも、安全に競技することも魅力です。北京同好会にも6歳の子供から60歳を超えた先生まで、約60名の会員が在籍し、一緒に稽古をしています。

それでも私は当初「中国の方が剣道を見たら、日本の軍国主義を思い出して不愉快に思うのではないか」という懸念を抱いたのも事実です。ところが、現在北京には二つの中国人による剣道団体があり、多くの若者が練習に励み、日本人同好会とも交流が深いことを知り、驚きました。なぜなのでしょう。恐らく、中国の方も、剣道の持つ礼儀、規律、努力といった目標に価値を見出し、共感してくれているからだと思います。

北京には他に韓国人剣道団体もいくつかあり1月には日中韓三カ国合同練習も行なわれました。またイギリス人、アメリカ人等、北京在住の他の国の方も練習に参加しています。剣道は、その魅力を見出した人であれば、国籍も関係なくできるものであることを私は北京で体感しています。

香港での大会には、北京、上海、広州、シンセンといった中国本土から若い中国人剣士が、そして日本、韓国、マカオ、香港、台湾、フィリピン、タイ等の各国・地域からも参加を得て全部で230名以上が、試合を繰り広げました。残念ながら北京チームは優勝できませんでしたが、高いレベルの試合を見ることで、中国、アジアでの剣道が発展していることを実感し、自分の剣道のレベルも上げなければと思いました。

北京赴任時には予想してなかったのですが、私は中国で多くの方と竹刀を交え、日中交流、国際交流も行なうことができ、大きな喜びを感じています。

(業務班 大久保晶光)

帰・赴任者紹介コーナー

(1) 坂元 芳匡



皆様はじめまして、2月21日に着任した坂元と申します。この度、中国事務所で草の根

技術協力と、保健医療案件の一部を担当することとなりました。異動前までは国土交通省に出向していましたが、しばらく「国際」とはかけ離れていたこともあり、すっかり浦島太郎状態になってしまったので、これから頭を切り替えていかなければ、という心境です。また、今回の着任が初めての海外暮らしなので、多少不安もありますが、歴史と文化が深く多様性も大きいこの国を少しずつ理解して、がんばっていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

JICAのホームページ：
> <http://www.jica.go.jp/china/library/news/index.html>
> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/library/01.html>
> チマイナ トピックス（和文・中文）
> <http://www.jica.go.jp/china/topics/index.html>
> <http://www.jica.go.jp/china/chinese/topics/index.html>

* 専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所沈 曉静 (shenxiaojing.cn@jica.go.jp) へてお願いいたします。

* その他お知らせ